

修学旅行と人間形成

— 社会科(公民科)教育の視点から —

箱石 匡行*

(1995年12月4日受理)

Masayuki HAKOISHI

School Excursion and the Formation of Human Personality

— From the Point of View of Social Studies (Civics) Education —

旅行という言葉を聞くと、われわれの心はときめく。これは、一体、なぜなのであろうか。おそらく、われわれは旅をするということに、多少とも日常生活から解放される可能性を予感し、普段の生活とは違った世界がそこに開かれてくるのではないかという期待の念を心に抱くからではないのだろうか。そうとすれば、修学旅行はわれわれの人間形成にとって大きな契機をなす出来事となることであろう。修学旅行の意義は、そこに見出されると言えるのではなからうか。

修学旅行に教育上の意義があるということは広く認められているところであろう。そうであれば、とりわけ優れた人間の形成という教育の究極的な目標にとってもつ意義は十分に検討されなければならないことであろう。今日ではさまざまな形の旅行が普及しているとはいっても、人格の形成にとって重要な時期にある青年期前期から後期にかけての人間の人格形成にとって、修学旅行という形の旅行が、ときには決定的な意義を持つこともあると言えるのではあるまいか。

われわれは修学旅行と人間形成について、ここでは社会科教育の視点から考察する。このような仕方課題を設定することに対して、おそらく大きな異論は生じてこないであろう。というのも、われわれが別の機会に明らかにしておいたように、社会科教育の究極的な目標とは、「優れた公民としての基礎的教養と共にその豊かな資質を培い養うこと」¹⁾にあるからである。

われわれがここで修学旅行といっているものは、いうまでもなく教育の一環として行われる旅行である。そしてこれは差し当り学校教育のなかで行われている短期の旅行を意味するものであるが、さらには海外見聞旅行や外国留学も当然のことながら一種の修学旅行と理解されてよいであろう。

われわれはこの論考において、まず初めに旅が人間にとってもつ意味を考える。つぎに

* 岩手大学教育学部社会科教育(哲学)

われわれは旅行がそして修学旅行が有する教育上の意義について何人かの思想家の考えを見ることにする。そして最後に、今日広く行なわれている修学旅行が優れた公民としての資質と教養を形成するという社会科教育の目標にとって有する意義と可能性を考察することにしたい。

I 旅する人間

しばしば「人生とは旅である」とか「ひとは旅人である」と言われる。旅を人生の隠喩とするこうした表現は決して珍しいものではないであろう。漂泊の思い止まず旅に出た芭蕉にとって、人生とは旅であり、ひとはみな旅人なのである。してみればわれわれの歩む道は人と人との行き交う道であり、人と人との出会いの場なのである。道はまた人の生き方としての道でもある。こうして道という語は柔道や剣道といった武道の名称に、また茶道や華道、香道などの芸道といった表現にも用いられることになるのである。

さらに、道は宇宙万物の根源という意味をももつ。老子のいう「道」がそれである。狩野直喜は老子の思想を説明して次のように言う、「天地萬物が生生して已まざる所以のものは、天地萬物自ら之を爲すのではなく、必ず主宰するものがあるとする。即ち天地萬物は自存的のものでなく、必ず或るものに隷属して始めて存在することが出来る。しかしながら、此の根本的のものは、捉模すべからず思議すべからず、又、言語を以つて説明し得べからざるものである」²⁾。これを強いて名づけ道というのである。

こうして旅する人間は道を歩む人間でもある。旅といい道といい、これは何れも人間存在の根本的な在り方を言いあてる言葉となっているのである。

さて、ここでは人生の隠喩としての旅について考えることにしよう。この旅は、一体、どこに始まりどこに終るのであろうか。私はどこからこの世界に到来したのか。そしてこの世界から私はどこへ行こうとしているのか。これは誰にとっても不可思議な謎であるはずである。そしてこれは哲学に固有の問題であるといっても良いであろう。

フランスの哲学者ガブリエル・マルセルの著書『旅する人間』は論文集ともいべき作品であるが、この作品を一貫しているのは、旅を人間の条件として捉える彼の人間観である。すなわち人間とは遍歴者 (Homo Viator) として規定されているのである。「おそらく安定した地上的秩序が確立されるのは、人間が遍歴者としての自己の条件に鋭い意識を保ちつづけている場合にかぎられる」³⁾。

マルセルがここで考えているのは、われわれの人生を彼岸との関わりにおいて捉えるということである。これは彼自身が認めているように、現代の多くの哲学者たちが反対する立場であろう。安定した地上的秩序の存在を旅人という人間の条件に結びつけて考えるということは、不合理なのではあるまいか。マルセルはまず進化という考えを排除する。ここでは進化の観念はまったく関係がないからである。むしろここで問題にされているのは希望ということなのである。

彼は希望のもつ意味についてこう語る、「希望とはおそらく、その本質において、なんらかの交わりの経験に十分内的に参与した魂のみがもちうる自在性である。かかる魂にして、はじめて願望や知識の反対を超越する行為を遂行することができるのであって、かかる行為によってこそ、その経験が担保と前提とを同時に与えてくれる生ける永続性を確認

するにいたるのである」⁴⁾。

ここでマルセルが語っていることは、次の二つのことなのである。つまり、第一に、「希望は、われわれの次元、あえて言うならアガペー（愛）の次元にしか存在しえず、個人的目的に気を奪われた孤独な『私』の次元には存在しない」⁵⁾ということなのである。そして第二に、希望のための場所が開かれるのは、魂が可知的なものなから自己を解放する手段を見出すときなのである。「希望は不可知を超えた知である」⁶⁾。この知とは「いっさいの思い上りを排除する知、与えられ授けられた知」⁷⁾なのである。

マルセルがここで旅人であると言うのはこの魂に他ならない。魂が〈存在する〉と言われるのは、「途上にある」⁸⁾ということである。ひとは今日、この直観を見失っているのであり、だからこそ、われわれはこの直観を再び取り戻さなければならないという訳なのである。

それでは、われわれの魂の旅とはどのような旅なのであろうか。われわれは旅を大きく二つのタイプに分けることができるであろう。第一は、オデュッセウス・タイプである。これは、オデュッセウスの漂流譚に示されているように、冒険や漂流の後に、ついには故郷に帰還するという旅である。そして第二は、ユダヤ的ノマド（流浪遊牧民）・タイプである。これはユダヤの民に示されるようなタイプであって、さまよえる流浪の果てに帰るべき故郷をもたない旅である。われわれの人生は、そしてわれわれの魂の旅とはどちらのタイプの旅なのであろうか。マルセルの思想からすれば、魂の旅はオデュッセウス・タイプの旅というべきなのかも知れない。

もしわれわれが無なる世界から創造されてひとつの存在者としてこの世界に到来しているのだとするならば、そしてこの世界に存在しているわれわれは自己の死によって再びあの無なる世界に立ち帰るのだと考えるならば、ここでもまた、われわれの人生の旅は自らの故郷に帰還するオデュッセウスの旅といえるのかも知れない。あるいは、われわれは死を契機にして自らのまったく知り得ない彼岸の世界へと向かっていくのだとすれば、われわれの旅とはノマドの旅ということにもなることであろう。

それにしても、人間が旅と不可分の存在であることに変わりはない。それでは旅はわれわれに何をもちたしてくるのであろうか。そして旅はわれわれに、一体、何をを見せてくれるのであろうか。旅がわれわれに開いてくれる世界、われわれがそこから垣間見ることのできる世界とは、日常性を超えた非日常的な世界というべきものである。したがって、その意味では、旅はわれわれにつねに異文化の世界を見せてくれるものだと言えるであろう。そうであれば、われわれは旅という言葉聞いて、日常性を超えた世界を予感しながら心を踊らせる訳なのである。

II 修学旅行の思想史

旅はわれわれに異文化との触合いを可能にしてくれる。してみれば修学旅行の最も大きな意義とは、これを通してわれわれがさまざまな意味での異文化に出会うということに見出される訳であろう。もちろん、自分の生きている文化以外に、この世界に多様な文化が存在することは誰でも知っているところである。われわれはその具体的な事柄を大抵は書物によって学ぶのである。しかし、書物によって学ぶことにはさまざまな弊害が付きま

う。修学旅行はそうした弊害を除きさって、見聞を広め豊かな教養を形成することに貢献してくれると言えるであろう⁹⁾。

西洋の思想家たちも古くから旅行のもつこうした意義をはっきり指摘しているのである。ここではヨーロッパ近世の幾人かの思想家の考えを取り上げてみることにしよう。

(1) M. ドゥ・モンテーニュ (1533-92)

まず初めに、十六世紀フランスの思想家ミッシェル・ドゥ・モンテーニュの考えを取り上げてみることにしよう。彼の教育論はその著書『エッセー』(1580-88年)第一巻、第二十六章「子供の教育について」のなかに見られる。彼は広く世間を見、世間と交わることの効用を指摘している。われわれの多くは、自分の殻に閉じこもっており、ごく狭い視野ごく短い見通ししかもっていないものである。しかしそうではない人もいるのである。たとえば、ソークラテースは、おまえはどこの人間かと問われて、「アテーナイの人間だ」と答える代りに、「世界の人間だ」と答えたという。これは彼が優れて充実した思想の持主であったので、世界全体を自分の住んでいる町と考え、自らの精神を全人類に向かって開いていたからなのである¹⁰⁾。

そして世界とはある人々からすれば、或る類概念の下に存在する多くの種概念の一つにすぎないとされている。しかしながら、モンテーニュからすれば、この世界は、われわれが自分を正しく知るために、そこに自分を写して見なければならぬ鏡に他ならない。この世界こそが生徒たちの教科書であると考えなければならないのである。実際、世界には多くの気質、学派、判断、意見、法律、習慣が見出されるのであって、このことがわれわれに物事を正しく判断しなければならないということを、そしてわれわれの判断力が不完全なものであり多くの弱点をもったものであることを教えてくれるのである。これは軽視してよい教科では決してないのである¹¹⁾。

このように書物の学問だけでなく、それ以上に、自分とは異なった世界に住む人々と交わるということが、われわれが物事を正しく判断するためには大切なことなのである。いってみれば、異文化に親しく接することは自分をより正しく認識するためにも必要なことであるということになる訳である。

(2) R. デカルト (1596-1650)

十七世紀フランスの哲学者ルネ・デカルトは、世間をよく見、そこから多くを学ぶ必要があると考える点において、モンテーニュと共通している。さらに彼は旅行することがもつ教育的な意味についても考えていると言えるであろう。彼がその『方法序説』(1637年)のなかで、世界を一種の本にたとえて、「世間という大きな書物(le grand livre du monde)」¹²⁾という表現を用いていることは広く知られているところであろう。

デカルトは先生たちの指導監督から離れても良いような年齢になるや、書物による学問を全くやめてしまうのである。そして彼自身のうちに、あるいは「世間という大きな書物」のうちに見出され得るような学問以外には、どんな学問も求めまいと決心して、旅行に出るのである。そして彼は宮廷や軍隊を見、さまざまな気質や境遇を有する人々を尋ね、さらにさまざまな経験を重ねるべく、運命が彼に遭遇させる偶然の出来事によって自分を鍛練し、また眼の前に現れてくる物事から何らかの利益を引き出せるような反省を加えるということを行ったのである。このような仕方ではデカルトはその青年時代を過ごしたのである¹³⁾。

(3) J. ロック (1632-1704)

つぎにイギリスの哲学者ジョン・ロックの教育論を取り上げて、修学旅行の意義と問題点を考えてみることにしたい。彼は『教育に関する考察』(1693年)第二十三章「海外旅行について」の初めにこう述べている、「教育における最後の部分は通例海外旅行です。海外旅行は教育の仕事の仕上げであり、紳士の完成であると普通考えられています」¹⁴⁾。島国であるイギリスにおける若者の教育は、いわば国際的な教養を具えた紳士の養成をその目標としている。幼少期からの教育の最後の段階にいたって、青年をヨーロッパ本土への旅行に旅立たせるのである。これは文字通り海外旅行になる訳である。

こうした外国旅行がその本来の目標を達成するためには、いくつかの条件が満たされなければならない。なによりもまず必要とされるのは、その青年が旅行を通して自分を向上させたいと望んでいるということである。その時には、青年は海外で身分のある人たちと交際し知り合いとなることも出来るであろうし、そうして国際的にも通用する立派な紳士となることも出来るであろう。青年は海外旅行を通してその目を広く開いて、彼の態度を用心深くし、また慎重にするとともに、物事をその本質において捉えるような習慣を身につけ、礼儀を重んじ、丁寧な態度で身を処し、外国人とも広く交際して、自由でありしかも自らの安全を保ち、彼らの好意的な評価を保ちつづけることが出来るようになるのである¹⁵⁾。

教育の仕上げとしての海外旅行は青年の教育のためのもの、つまり青年の資質を豊かに開花させるためのもの、要するに青年を向上させるためのものでなくてはならない。こうしたことを改めて指摘するというのは、海外修学旅行には基本的な問題が見出されるからである。それは、海外旅行がもたらしてくれるはずの大きな利益というものが、はたして青年期の若者たちにおいてうまく達成されるのかどうか、という問題である。

海外旅行がもたらしてくれると考えられる大きな利益とは、つぎの二つのものである。第一は言葉、外国語の習得である。そして第二は、自分が普段生活している同じ教区の人たちとか近所の人たちとは異なった人たちと交際することによって、自らの知識と分別を向上させることが出来るということである。というのも、そうした人たちは自分たちとは異なった気質や習慣、生活の仕方をしているからである。

ところが、海外旅行に適した時期つまり十六歳から二十一歳の時期の青年は、海外旅行がもたらしてくれるような資質を向上させるためには、生涯のうちでもっとも不適当な時期なのである。

まず第一に、外国語の習得について言えば、七歳から十四ないし十六歳の年齢層であれば、外国語の習得に相応しい時期であるといえるが、しかしそれ以上の年齢の青年であれば、海外旅行にでかけていって外国語を習得するとか訓練するためには、すでに遅すぎるというのである。

そして第二に、異文化の生活に触れることによって自分の知識や分別を豊かに養うといっても、これは青年期の人間に相応しい課題とはいわれないのである。それというのも、青年期というのは子供が大人と交わり始める時期であって、つまり自分を大人であると考え、また大人の非行を楽しみ、それを自慢に思ったりするような時期でもあるからである。さらに青年は自分を指導監督するものの存在を厭わしく思う時期にあるわけなのだから、この時期に両親なり友人なりの監督から離れて、たかだか家庭教師だけのものとで外国生活

をすることは当の青年をさまざまな誘惑にさらすことにもなるのである。しかもその家庭教師が、自分の指導監督すべき青年に対して、はたして十分な配慮を行うかどうかという点について、ひとは必ずしも安心してはられないからである。

青年とは子供と大人との中間的存在者であり、だからひとは青年と呼ばれるのである。もちろん、青年が大人によって全面的に指導監督されなければならないという訳ではない。しかし、だからといって、青年が自律した人間であると言うことも出来ないのである。理性によって自律できるようになるには、ひとはもう少し年齢を加え思慮と分別を身に付けなければならないのである¹⁹⁾。

以上のように、ロックは教育の仕上げの段階における海外への修学旅行が青年に大きな利益をもたらすことを認めている。しかし、青年が実際にこの大きな利益を身に付けるためには、青年自身の向上心と旅行についての十分な配慮が必要なのである。ロックはおそらくは遊びに墮した海外修学旅行をしている青年貴族の例を多く見聞きしていたに違いないのであって、だから海外修学旅行の大きな利益を指摘しながらも、その否定的な側面も彼は的確に指摘している訳なのであろう。

(4) J. -J. ルソー (1712-78)

修学旅行は有益かと問えば、ひとはその問題点を列挙して、ついには否定的な答えを導き出すかも知れない。こうした問いの設定と回答の仕方について、ジャン=ジャック・ルソーは『エミール』(1762年)のなかでつぎのように批評している、「青年が旅をすることはよいことかどうかと人々ははずねる。そして、それについていろんなことを言い合っている。質問をちがったふうにもちだせば、つまり、人間は旅をしたことがあるほうがよいか、とたずねるとすれば、たぶん人々はそんなに言い争いはしない」¹⁷⁾。

それでは、旅行をすることによって、ひとは何を学ぶことが出来るのであろうか。ルソーは書物に偏った勉学の弊害を旅行によって正すことができると考えているように思われる。「書物の悪用は学問を殺す。人々は、読んだことは知っているものだと思い、自分はもうそれを学ぶ必要はないと思いこんでいる。あまりたくさん読むことは、なまいきな無学者をつくるのには役だつにすぎない。文学が栄えたすべての時代のなかで、現代ほど書物が読まれている時代はないし、現代ほど人々がものを知らない時代もない。ヨーロッパのすべての国のなかで、フランスほどたくさんの歴史や旅行記が印刷されている国はないし、フランスほど人々がほかの国民の精神や風俗を知らない国もない。たくさんの書物はわたしたちに世界という書物を忘れさせる。あるいは、この書物をまだ読んでいても、わたしたちはみんな、自分のページだけがめっている。」¹⁸⁾

しかしながら、旅行することによって書物の学問の弊害を取り除くことが出来ると単純に考えてはなるまい。というのは、ルソーも言うように、旅行記を読んでみて誰でも気づくことであろうが、同じ国民について同じ印象や観念を与えるような旅行記が二つ見出されるということはないからである。したがって、ルソーは「観察すべき事実はどんな種類のことで、読んではならない、見なければならない」¹⁹⁾と言うのである。

もちろん、ルソーが修学旅行に大きな意義を認めようとしていることは確かなことであろう。ここに一つの問いが、教育の根幹に触れる問いがある。それは、「立派に教育された人間が自分の同国人しか知らなくてもいいのか、あるいは、人間一般を知る必要があるのか」²⁰⁾という問題である。これに対して、その必要はないと答える人はいないであら

う。してみれば、問われるべきことは旅行の仕方であろう。「観察するためには、見る目をもっていなければならないし、知りたいと思っている対象のほうへその目をむけなければならない」²¹⁾。考える技術を知らない人であれば、旅行を通して学ぶよりは、むしろ書物を読むほうがはるかに多くのことを学ぶことが出来るのである。それは、見ようとするものしか目に入ってこないからである。フランス人ほど旅行をする国民はいないであろうが、それにもかかわらず、フランス人が他の諸国民について知ることのもっとも少ない国民であるということも、そのためなのである。

旅行することは、さまざまな国々の人間を見るために、そうして人間性一般を知るために大切なことである。しかし、修学旅行の目的を達成するためには、ひとは二つのことをよく考えなければならない。第一は、旅行の目的にかなったような、適切な旅行を行うということである。そして第二は、旅行は有益であるとはいっても、旅行に出て、他の国々の人々の生活を見、そして人間性一般を理解することが出来るような人ということになると、それはわずかの人たちだけなのである。それは、「しっかりしていて、まちがったことを教えられても心を迷わされず、不徳の見本を見せられてもそれにひきずられない人」²²⁾だけなのである。というのも、「旅行は天性をその傾向へ推しすすめ、人間を完全によくしたり悪くしたりする。世界を廻って帰ってくる人は、帰ってきたとき、その後一生のあいだ変らない人になっている」²³⁾からである。

それでは、旅行が優れた成果をもたらすのは、どのような場合であろうか。ルソーはこう語る、「めぐまれた素質の青年、よい天性をよく育てられた青年、そして、ほんとうに知識をひろめたいという意図をもって旅する青年は、みんな、でかけていったときよりもいっそうすぐれた者、いっそう賢明な者になって帰ってくる」²⁴⁾。

それでは、旅はどのように行うのがよいのであろうか。「理性によってなされることはすべて規則をもたなければならない。教育の一部と考えられる旅行にもその規則がなければならない」²⁵⁾。どんな旅であれ旅をすればよいという訳ではない。ルソーがここで語っているのは、あくまでも教育の一環と考えられる旅行である。したがって旅といっても放浪の旅は除外される。またここでいう旅を、知識を得るための旅といっても不十分であろう。これを適切に言えば、明確な目標をもった知識の獲得を可能にしてくれるような旅をすることが大切なのである。

このように修学旅行においては、旅行をする目的が明確にされていなければならない。その目的とは青年期の教育目標に他ならない。ルソーはここでは、教育をおおよそ三段階に考えているように思われる。第一は、他の存在との自然的な諸関連において自分を考える段階であり、第二は、他の人間との道徳的な関連において自分を考える段階である。そして第三は、同じ市民たちとの社会的な関連において自分を考えるという段階である²⁶⁾。この最後の段階において、修学旅行を行うというのが、ルソーの考えなのである。

したがって、ルソーの考える修学旅行の目的を達成するためには、青年は多様な人々の社会生活や社会の諸制度、統治形態をよく知らなければならない。「かれはまず統治体〔政府〕一般の本質、さまざまな統治形態を研究し、さらにかれが生まれた国の統治体を研究して、この統治体のもとに生活することが自分にとって適当かどうかを知らなければならない。なにものによっても廃棄されえない一つの権利によって、各人は、成年に達して自己の支配者になれば、かれを共同体に加入させている約束を破棄して、その共同体が

成立している国を去ることもまた、自由にできることになるからだ。かれは理性の時期ののちにもその国にとどまることによるのみ、かれの父祖たちが結んだ約束を暗黙のうちに確認しているものとみなされる」²⁷⁾。

これが、修学旅行において青年がよく見、そして考えるべきことなのである。ルソーはこれに加えて、修学旅行における教師の役割についても批評している。つまり教師は青年の教育により、むしろ自分の関心や楽しみごとに気をとられていて、青年を都市から都市へ、宮殿から宮殿へと連れて歩く。あるいは教師が学者や文学者であれば、青年を図書館や骨董屋に連れていったり、また古い遺跡や碑文を見せようとする²⁸⁾。しかしこうしたことは、修学旅行の本来の目的とはまったくそぐわないことなのである。それというのも、修学旅行とは、ルソーからすれば、同時代の他の国々の人々を、また他の国々の制度や法律などをよく見、考えるためのものだからである。

Ⅲ 今日の修学旅行の諸類型

今日の小学生、中学生そして高校生が経験する修学旅行は、おおよそ次のようなタイプに分類することが出来るであろう。そして大学生の研修旅行もほぼ同じように分類することが出来るであろう。

①日本の伝統的文化を学ぶタイプの修学旅行

これは修学旅行の正統的なタイプといえるものであろう。京都、奈良といった長い歴史をもった都市を訪れて、その歴史的建造物や史蹟や名所等を見ながら伝統的文化を学ぶという修学旅行である。

②調査・体験学習型の修学旅行

これは一定の地域を調査しながら、そこでの農林漁業等を体験し、その地域の人々との触れ合いをもつというものである。これは多くの都市をまわる旅行とは異なって、一つの地域に滞在して、その地域の生活を体験しながら、さまざまな事柄を学ぶというものである。

③合宿研修型の修学旅行

これは②の変形ともいえるものである。地理や歴史、理科等の合科的研修・合宿型の旅行である。地域の人たちとの交流というよりも、合宿をとおして生徒相互の交流がはかれる。普段の学校生活では望むことの出来ないような生徒相互の交流をはかることも出来る。

④海外見聞・語学研修型の修学旅行

飛行機を利用して、近隣アジア諸国だけでなく欧米諸国を訪れて、それぞれの地域の風土と文化の一端に触れて、諸外国についての理解を深めると共に、国際理解への眼を開く修学旅行である。語学研修を併せて行うことも出来るであろう。

⑤ヴォランティア体験型の修学旅行

これは、さまざまな領域でのヴォランティア活動を体験しながら、人間性について、また何か或る領域の仕事について学ぶという旅行である。一ヶ所だけあるいは数ヶ所の施設にわたるといふこともあるが、同じ領域の仕事をヴォランティアとして行いな

から学ぶという旅行である。

たとえば、高齢者の福祉の現状と問題点を調査研究するために、それに関係する諸施設でのボランティア活動を行うということも、このタイプの修学旅行に加えてよいであろう²⁹⁾。ちなみに、イギリスでは大学入学試験合格後に、1年間の入学猶予の制度があり、ボランティアとして世間という書物の勉強をする制度があるという³⁰⁾。

上に示したタイプのうち、①②及び③について言えば、いくつかの教科内容を相互に関連させながら、優れた効果をあげる旅行にすることも出来るであろう。たとえば、国語科、地理歴史科、公民科、理科等との関連を考えることも出来るであろう。そうすることによって、日本の歴史とか地理、生物の生態系、文学などについて、教室では得られないような知識を多面的かつ総合的に習得することも出来ることであろう。

国際交流は今後、ますます推進されていくであろうし、また高齢社会が到来しつつあるといわれているので、こうした社会の変貌を考えるならば、今後は④や⑤のタイプの修学旅行を考えていくことも必要となることであろう。

具体的に修学旅行を計画する場合には、それぞれの学校の特徴であるとか、どのような年齢層の児童生徒を対象にするものなのか、その旅行にどのような教育目標をもたせるのか、といったことをよく検討することが必要であることは言うまでもないであろう。

近年、少人数のグループによる生徒自身の主体的な計画による修学旅行が少しずつ増えてきているようである。今後この種の修学・研修旅行の形態がしだいに増加していくであろう。これは生徒の自主的な学習意欲が生かされるわけであるから、自ら学ぶ意欲と能力をもった人間を育成するうえで、すすめられてよいものであるであろう。こうした動向に対応していくためには、修学旅行について指導する立場にある教師は多くのコース、多くのプログラムを用意しておくことが必要であろうし、また生徒がコースの設定を考える場合に教師はこれに指導助言できるようにしておくことが必要となるであろう。

いずれのタイプの修学旅行であれ、これはあくまでも教育の一環として行われる旅行である。したがって修学旅行をとおして、それまでには得られなかったものを見方ができるようになるとか、新しい世界への眼が開かれるとか、そうしたことによって、それぞれの生徒が人間としてそれだけ豊かに育っていくことが大切なのである。

修学旅行は、その意味では、生徒たちにそれだけのインパクトを与えうものではなくてはならないと言うべきであるかも知れない。旅行するということは、日常生活から離れて、一種の非日常的な世界を垣間見る、あるいは非日常的な世界に触れるということなのである。だからこそ、とりわけ親から自立しようとしている青年期の若者たちにとって、修学旅行は魅力あることでもある訳なのである。

IV 修学旅行の教育的意義と可能性

青年期に修学旅行を経験することは、自己を見つめ直すよい機会となるであろう。外国への旅行であれば、はっきりと異文化との出会いを経験することになり、これが自己形成に大きな利益をもたらすことにもなるであろう。もちろん、同じ国内での修学旅行であっても、青少年は自分の普段の日常生活とは異なった生活を見出すであろう。このことは自

分の生活を、そして自己自身を新しい視点から捉え直す契機ともなることであろう。ここでいう異文化とは、自分の日常の生活文化とは異なっているそれを広く意味している。したがって修学旅行の意義はひとが異文化と出会う機会となるところに見出されると言ってもよいであろう。

異文化の担い手である人々の人間性、またその人々の現実の生活形式、またかつての文化を支えていた精神の具体的な現れとしての文化遺産などを、直接に見、それに親しく触れることは、だれにとっても自己を相対化して捉える貴重な体験となることであろう。修学旅行はそのような貴重な機会であるといえるであろう。そしてこれは旅をするということの本質的な意味に他ならないのである。

もちろん、旅行するということに積極的な意味を見出すことが出来ないという否定的な見方もあるに違いない。こうした考え対しては、それがどのような観点から提起されている見解なのかを、われわれは知る必要があるだろう。たとえば、修学旅行といっても、それが実際にはたんなる観光旅行であるというのであれば、その旅行が青年にとって大きな利益をもたらすといったことは期待できないであろう。あるいは場合によっては、旅行が青年を腐敗墮落させるということもありうるであろう。こうした危険性はロックもルソーも指摘していることである。事実、英国貴族の修学旅行が放蕩の旅行であるといったことも決して珍しいことではなかったのである³¹⁾。

そうした問題を解決するように努めながら、青年時代に諸々の地方を、多くの国々を遍歴し、さまざまな世界と人間に親しく接する機会をもつことは、人間性というものを深く理解するために有益である。これは改めて言うまでもないことであろう。その意味では、彷徨し遍歴する青年は、人生を確立するための修業をしているのだとも言えることであろう。このことはゲーテの作品『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のテーマともなっているのである。してみれば青年期のモラトリアムが人間形成において重要であることは、古くから知られていたことであるとも言えるわけであろう。青年の彷徨と遍歴の旅とは人生を確立するための一種の修学旅行に他ならないのである。

学校教育の一環として行われる修学旅行であっても、その本質は旅行そのものの本質と基本的に変わることはない。すなわち、教育的な目的と配慮のもとに行われる修学旅行をとおして、ひとは〈非日常的な世界〉〈異文化の世界〉への眼が開かれる。そして修学旅行を契機として、ひとは自分をよく見つめ、自分の生活をよく考えることができる。これは修学旅行の大きな教育上の意味といえるものである。

修学旅行の本質的な可能性は旅のもつ可能性に他ならない。ひとは旅に出ることによって、自分の日常性とは異なった世界を経験する。そのことによって自分を見つめる機会を得ることも出来るであろうし、他の生活圏や他の文化圏において現に行われている社会制度を多く見、そして考えることが出来るであろう。そうしたことから自分の生活や自分の属している社会を見るということも可能になってくることであろう。したがって、優れた公民の育成という社会科（公民科）教育の目標に対し、さらに豊かな人間性を具えた人間の育成という教育の本来の目標に対して、修学旅行が今後も大きな可能性をもっていることは明らかであろう。

旅をするということが人間の存在にとって本質的なことである以上、修学旅行の意義もまた教育にとって本質的なことなのである。

註

- 1) 箱石匡行「社会科教育の理念と公民の概念」(『岩手大学教育学部附属教育実践研究センター研究紀要』第5号, 1995年3月), 29頁。
- 2) 狩野直喜著『中國哲學史』(岩波書店, 昭和48年[1973年]5月, 第12刷), 186頁。
- 3) Gabriel Marcel, *Homo Viator, Prolégomènes à une Métaphysique de l'Espérance*, (Paris, Aubier, Montaigne, 1994), Avant-Propos, p.5. 『マルセル著作集4』「まえがき」山崎庸一郎訳(春秋社, 1968年7月, 第1刷), 7頁。
- 4) *Ibid.*, p.86. 同前『マルセル著作集4』「希望の現象学と形而上学にかんする草案」山崎庸一郎訳, 88頁。
- 5) *Ibid.*, p.9. 同前, 11頁。
- 6) *Ibid.* 同前, 11-12頁。
- 7) *Ibid.* 同前, 12頁。
- 8) *Ibid.*, p.10. 同前。
- 9) この点では, 今日のようにビデオ映像が容易に利用できる時代にあつては, 修学旅行の意義が薄れてきていると言えるかも知れない。しかし映像による学習と実際の体験とは大きな意味の差異があることに, われわれはここで注意しておいてよいであろう。何かあるものを映像によって見ることと, そのものを直接見ることとの間には, 存在論上の越えられない意味の差異があるということである。
- 10) Michel de Montaigne, *Essais*, tome I, Édition de M. Rat, (Paris, Éditions Garnier Frère, 1974), p.168. M. ドゥ・モンテーニュ『エッセー(一)』原二郎訳(岩波書店, 文庫, 昭和50年[1975年]1月, 第10刷), 297-298頁。
- 11) *Ibid.*, p.169. 同前, 298-299頁。
- 12) René Descartes, *Discours de la Méthode*, Texte et Commentaires par Étienne Gilson, (Paris, J.Vrin, 1976), p.9. R. デカルト『方法序説』第1部, 落合太郎訳(岩波書店, 文庫, 1979年, 第34刷), 20頁。
- 13) *Ibid.* 同前, 20-21頁。
- 14) J. ロック『教育に関する考察』服部知文訳(岩波書店, 文庫, 昭和49年[1974年], 第8刷), 327頁。
- 15) 同前, 330頁。
- 16) 同前, 327-328頁。
- 17) Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, Édition de F. et P. Richard, (Paris, Éditions Garnier Frère, 1976), p.574. ルソー『エミール』(下)今野一男訳(岩波書店, 文庫, 1979年, 第21刷), 211頁。
- 18) *Ibid.* 同前, 212頁。訳文の一部を変更。
- 19) *Ibid.*, p.575. 同前, 213頁。
- 20) *Ibid.* 同前。
- 21) *Ibid.*, p.576. 同前, 214頁。
- 22) *Ibid.*, p.580. 同前, 220頁。

- 23) *Ibid.* 同前。
- 24) *Ibid.* 同前, 221頁。
- 25) *Ibid.* 同前。
- 26) *Ibid.*, p. 581. 同前, 221-222頁。
- 27) *Ibid.* 同前, 222頁。
- 28) *Ibid.*, pp. 597-598. 同前, 245頁。
- 29) こうした種類の旅行報告としては、たとえば、山井和則『体験ルポ 世界の高齢者福祉』（岩波書店、新書、1994年、第12刷）そして山井和則・斉藤弥生『体験ルポ 日本の高齢者福祉』（岩波書店、新書、1994年、第1刷）などが挙げられるであろう。
- 30) 藤原正彦『遥かなるケンブリッジ 一数学者のイギリス』（新潮社、文庫、平成6年〔1994年〕、初版）、206頁。
- 31) 本城靖久『グランド・ツアー』（中央公論社、文庫、1994年、初版）。